



このガラスハウスにカーテンレールはない。代わりに住民は既存の空き家の躯体をカーテンのように見立てて生活する。



このガラスハウスに壁で仕切られないリビングルームはない。代わりに住民は半屋外のバスタイムを楽しみ、既存躯体を物かたて思い思いにシャワーカーテンを設置する。

Re-wilding Urban Glass House

郊外の豊かな自然の中だけで成り立っていた20世紀のガラスの家は狭隘で、災害のリスクを抱える、21世紀の木密都市において形を変えてあらわれる。

最小限の生活空間が確保されたファイアライトガラス製の小さなガラスの家を空き家の中に挿入する。耐火型のガラスの家は、逃げ道の少ない木造密集地の簡易なシェルターとなり、既存の空き家は、隣家とのあいだにできた小さな自然環境のように読み替えられる。

隣家からの視線を考えながら空き家の壁と屋根は解体され、生活動線に応じた獣道ができ、軸組みには植物がやどり、まちと家との自然の境界をあいまいにしていく。野生化していく過去の家をまとった未来のガラスの家は、家の境界を越えた新しい木密の自然をつくりだす。



木密の都市にあらわれたガラスハウスは、身の回りの小さな自然環境に依存しながら暮らすことを促す。



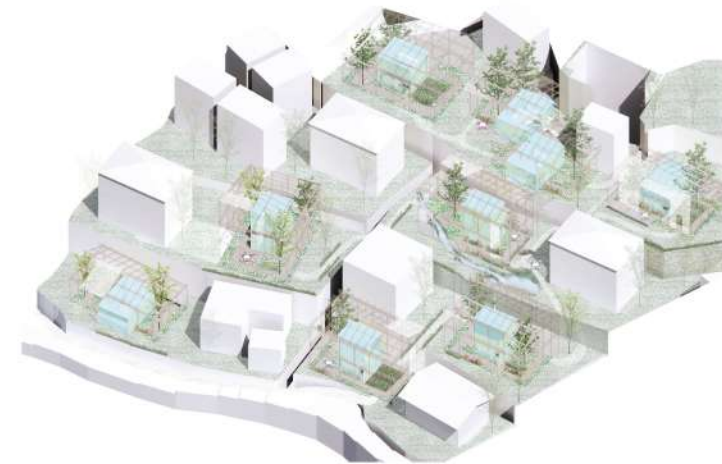
既存の空き家住宅の床と間柱を抜いたスケルトンの状態。



キッチンや寝室などの機能を持つファイアライトガラスのシェルター



日当たりやプライバシーを考えながら植物や舗装が整えられていく



狭くて、小さなガラスハウスの群れは、木密地域の防災性を高め、敷地を飛び越えたあたらしい自然の風景の連続をつくる。